

I-2 「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》としての実践」

多様な視点で社会的事象を見つめ、主体的な社会参画の資質を培う

—現代社会の特徴をとらえ、「効率と公正」の視点で合意形成を考える授業実践(第3学年)—



現代の社会はあらゆる事象が複雑に絡み合っている社会である。情報化、国際化、子どもたちを取り巻く環境も日々変化している社会である。価値観が多様化している現代の社会の中で、よりよい社会を創るために必要なことはなんだろうか。現代社会を見つめ、特徴をさぐることで、自分たちの生活や将来について考えていく。その中から、これからの社会は自分たちが創り上げていくという意識をもつことの意義を培っていく授業実践を試みた。

1 学びの構想

現代社会の特徴を多様な視点で捉える

本単元は、現代社会の特徴をつかみ、これからの日本について考えていく公民分野の導入単元である。複雑に絡み合う社会的事象は、様々な条件や要因によって成り立ち、それぞれが関連しあって絶えず変化している。このことをつかむためには、社会的事象に対して多様な視点をもって見つめ、いろいろな立場に立って考えていく必要がある。そのため、1つの社会的事象をとり上げて現代社会の特徴をつかませるのではなく、単元を貫く大きな主題をもとに、多様な視点からいくつもの社会的事象を見つめ、多面的・多角的に考察していかなければならない。しかし、それを見つめる視座に当事者性がなければ、特徴をつかみ考察していく意義や今後の日本を考えていく切実性が出てこなくなる可能性がある。

そのため、子どもたちが自分の問題としてとらえ、自分の考えを持ちながら、「これからの日本の方向性は自分たちが決めていく」という、中長期的な視野の問題意識を持たせることが必要になる。現代社会の一員として、積極的に社会に参画する意欲と社会的事象を考察する力を培っていくために本単元を構築した。

「効率と公正」の視点で社会的事象を捉える

多様な人々が生活する現代社会では、立場が違えば価値観も違うため、様々な意見の対立が見られる。その対立を解消し、よりよい方向に向けて合意形成することで、社会は成り立っていることをつかんでいく。その過程で、2つの視点を用いて課題を判断

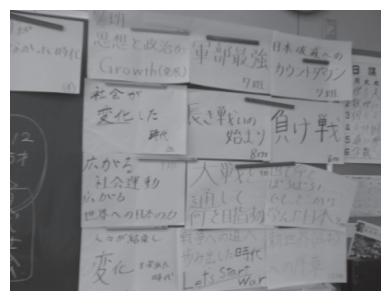
していく。1つは、できるだけ多くの人のためになっているか、無駄を省く最善のものになっているかを考える「効率」の視点。もう1つは、不当に不利益を被る人や偏った利益配分になっていないかなどの、手続き・機会・結果の「公正」の視点である。これは、今後の公民分野の学習で共通の尺度として、身近な問題においても、社会全体の問題においても、社会的事象を捉える視点として活用していくことができる。具体的な事柄をとりあげ、協働で比較検討しながら判断する力を身につけさせていきたいと考えた。

2 学びのストーリー

歴史学習から公民学習につなげる

(第1時)

歴史学習では明治時代以降の学習において、その時代にネーミングをして、時代の特徴をつかむ学習をしてきた。一人一人がネーミングを考



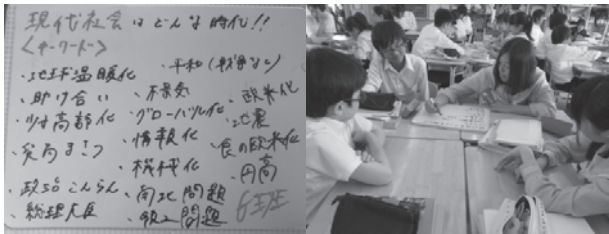
え、その理由を班で説明しながら意見交換し、グループネーミングを決めていく。そのグループネーミングを全体で討議しながら、各時代を大観していくことにつなげていった。

この時間の最初に大正時代、昭和Ⅰ期、昭和Ⅱ期の各班が書いたネーミングを黒板に貼り、時代の移り変わりを確認した。昭和Ⅱ期では「国も命もボロボロに…でもそこから学んだ日本」(10班)などの

ネーミングをつけながら、時代の特徴をつかんでいった。黒板に全班のネーミングを貼り、教師がその横に数直線を描き、1945年、1998年（子どもたちの誕生年）、2012年を書き込んだ。

「日本が戦争でぼろぼろになった1945年、そして54年たって君たちが生まれ、現在2012年。こんなに便利で快適な社会になった。この約70年にどんなことがあったのだろうか？そしてどんな社会になったのだろうか？」と、戦争から70年でどのようなことがあって、このような社会になったかを考えていく問題を提起した。

子どもたちが自分たちの社会ってどんな社会なのか、口々に話し始めたので、それぞれの思いを表出できるように、ミニホワイトボードを配布した。「現代社会はどのような社会か？」として、この社会を表すキーワードを出し合ってみた。



6 班のキーワードと話し合いの様子

自分たちの生活している社会なので、たくさんキーワードが出てくると思われたが、班の話し合いの中では、それほど多く出てきていないようだった。

*以下子どもの名前は仮名とする。

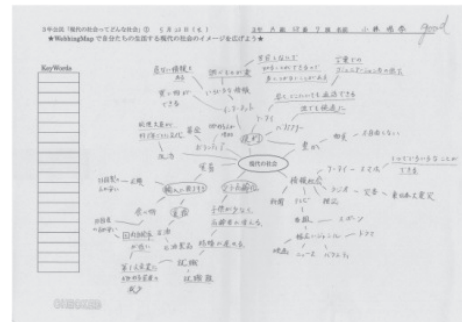
6 班 （1 班 4 人）

みさ：地球温暖化、東日本大震災・・・
良太：少子高齢化もあるよね、政治も混乱してる。
俊哉：総理大臣がころころ替わるしね。
グローバリ化もあるし情報化もあるよね。
良太：円高だし、景気も悪いし、領土問題もある。
瑞希：エネルギーとか食料の問題もあるよ。
みさ：でも平和だね。

6 班では自分たちの生活の中からというより、社会全体から出てくるイメージをキーワード化しようとしていた。しかし、思ったよりも数が出てこなく、頭を悩ませている様子であった。この時間は出てきたキーワードを2つの班が発表し、他の班は自分たちのキーワードと比較しながら発表を聞いた。そして、教師から「現代社会はどのような社会なのか、今までと同じようにネーミングをして考えていこう」と単元学習の方向性を示した。

現代社会のネーミングを考えるⅠ（第2時）

最初に、現代社会のネーミングを「現代社会は〇〇だから〇〇な社会である」とつけていくことを確認した。そして、現代社会のイメージを広げるために WebbingMap を作成していった。前時に書いたホワイトボードを見ながら、自分の中の現代社会のイメージを広げていく。広がったイメージの中で、自分がポイントだと思うものに赤丸をつけながら、自分の考える特徴を絞っていく。それをもとに1回目のネーミングとその理由を明記していった。そして、それをもとにすると、どんな将来になるか80年後までの予測を描き、班のみんなに自分の考えを発表していった。



瑞希の WebbingMap

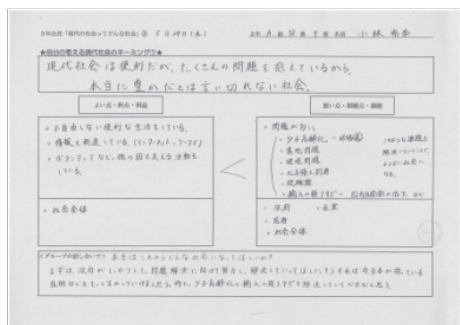
瑞希：「現代の社会は便利だが、たくさん抱えているから、本当に豊かだとは言いきれない社会」

私たちは便利な生活を送っているが、輸入に頼りすぎていることや少子高齢化、基地問題、環境問題などたくさん抱えているから、本当に豊かだとは言いきれないと思う。これらの問題を解決していくのが、これからの日本を左右する大きなカギになると思います。

瑞希は、WebbingMap の中で便利というキーワードから良さを考えたが、マイナス面も取り上げ、少子高齢化を大きな課題と考えている。

その中で気になる班が見えてきた。10班である。10班はそれまでの歴史学習のネーミングでは、意欲の高い男子2人を中心に活発な意見交換ができる班であった。しかし、今回のネーミング意見交換では、従前のような意欲が見られなかった。歴史学習から公民学習へ移行するときに意欲の高まりが見られないこともあるので、注意して見ていくことにした。

現代社会の利点・問題点を比較する (第3時)



瑞希のメリット・デメリット比較

考えたネーミングについて、各自がメリット、デメリットを考え、ワークシートに記入していった。そして、それはどのような立場の人に影響があるかも考えていった。これは「効率と公正」の視点について考えていく布石とするためである。

各自考えたメリット・デメリットを比較して、どちらが大きいかわかるように不等号で表してみた。するとメリットの方が大きいとするのは13人、デメリットの方が大きいとするのは22人、同じと考えているのは3人であった。そこで、自分の考えを班の中で意見交換しながら、付箋に現代社会の問題点を書き出し、分類していくことにしていった。現代社会は様々な問題点を抱えることをつかみ、どの問題点から解決していくかを考えていくためと教師は考えていた。



そして、自分のネーミングと分類した問題点をもとに、グループのネーミングを作成し、黒板に貼ってクラス全体に紹介し、この時間を終えた。

このときのグループネーミングは以下の通りである。

6班「現代の社会は政治が荒れていて、これからの日本が見えない不安定な社会」

7班「問題が多くて一寸先は闇、もう闇しか見えない」

10班「チキンな社会」

このグループネーミングと現代社会の課題を分類した付箋を見て、教師はよくない流れになったと反省した。メリット・デメリットを考え比較したが、デメリットだけに着目して、問題点を付箋で書き出してしまったのだ。ネーミングがマイナスなものだけになってしまうのは、当然の結果といえる。メリット・デメリットを比較検討する活動の一つ飛ばしてしまったのだ。このままのマイナスネーミングをもとに今後の学習は進められないので、次時にもう一度、グループネーミングをやり直すことにした。

現代社会のネーミングを考えるⅡ (第4時)

前時のマイナスイメージから離れるために、前時に考えた各自のメリット・デメリットをクラス全体の中で発表することから始めた。キーワードを出しながら意見を発表していく。関連ある内容をつながながら、それを教師が板書していった。関連あるものをつないでいくと、多様な視点が現代社会には含まれていることがわかり、クラス全体で共通理解した。やはり前時に作成した問題点の付箋が大きく残っているようで、デメリット面が数多く出てきていた。デメリット面が多かったので、「今の社会は、こんなに悪い社会なのだろうか？これから君たちが生きていく社会は、こんなに暗く希望のない社会なのか？」と問いかけてみた。実際に快適で、何不自由なく幸せに生活している子どもたちの実態と、自分たちが出しているデメリットのずれを指摘した。そして、「これから君たちが生きていく社会は、どんな社会になってほしいか？」と問いかけ、将来を考えることで、軌道修正をかけていくことにした。まず個人で考え、班で話し合い、再度グループのネーミングを決めていった。

みさ：みんな考え方ってうか、見方がちがうよね。歴史のネーミングはすぐに考えついたけど、自分の住んでいる社会を表現するのは難しい。

良太：歴史はさ、出来事とかから考えていくからわりと簡単なんだよね。なんか自分の生活してる時代って複雑だよ

6班ではネーミングを作成するとき、上記のような会話が交わされていた。この内容を全体に広めると、他の班でも「難しい」という声が上がった。過去の出来事をもとにネーミングするのと、現実社会をネーミングするの違いを感じていることがわかる。現代社会は多様な視点が複雑に絡み合う社会であることからこそ、難しいことを認識することになった。

ここで作成した各班のネーミングは以下の通りである。

6班：現代社会は、技術が向上しており、少しずつ進歩している社会

7班：てんびんのようにメリットとデメリットがなんとか釣り合っていて、少しでもどちらかに傾いたら、今の生活はできない

10班：人が悪い社会

これを見ると、前時のものより変化が見られ、メリットにも目を向け、将来の社会について考えているものになっている。現代社会の特徴をつかむ学習につなげられるネーミングとなり、主題へ向けて子どもたちの思考の流れを軌道修正ができたと感じた。しかし、10班をみると「チキンな社会」から「人

が悪い社会」と言葉は変わっているが、マイナスイメージのネーミングになってしまっている。個人のネーミングではそこまでマイナスイメージをもってはいなかったが、前時の社会の問題点を付箋にかくときも、「問題点が多すぎてしばれません」「漠然としていて特徴をとらえるのが難しい」などの意見が出ていた。様々な要因で不安定な社会になっていることをなんとかまとめていこうとしているが、うまく言葉にできないようだ。

そこで、10班のネーミングの意味を発表してもらった

敦也：利点も多く便利で快適な社会であるが、問題点を発生させたり、引き起こしたりするのは人だから、全ての原因は人にあるということです。

生徒：人が悪いって言ったら、全ての時代にあてはまってしまふよ。この時代だけにあてはまるものにしなきゃネーミングにならないよ。

反論を受けるといつもならそれに対して反論する敦也が、歯切れが悪く終わってしまった。10班の中では現代社会の特徴をつかむ意義を捉えられていないという段階であったことがわかる。

ここで、グループネーミングをじっくり見させ、「こんな社会でいいのか？」と再度問いかけてみた。「これからの日本を創るのは君たちだよ。現代社会の一員としてこの社会を考えていこう」と主題を確認した。

そこで、前時のワークシートより、どのような視点で特徴を捉えようとしているかを示した全員のモニタリング資料を配布し、視点の多様さを確認した。

| 現代社会を捉える視点 | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|----|----|----|-----|-----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|
| NO | 名前 | 環境 | 人口 | 少子化 | 高齢化 | 政治 | 不安定 | 経済 | 技術 | 便利 | 物質 | 豊穡 | 安全 | 治安 |
| 1 | く | ● | | | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 2 | く | ● | | ● | ● | ● | | | | | | | ● | ● |
| 3 | く | ● | | ● | ● | ● | | | | | | | ● | ● |
| 4 | く | ● | ● | | ● | | | | ● | ● | | | ● | |
| 5 | ま | | | | | | | ● | ● | | | | ● | ● |
| 6 | く | | | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 7 | ま | | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 8 | ま | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |

どのような視点でとらえているかを示すモニタリング資料

そして、これをもとに自分やグループが考えたネーミングが本当かどうかを検証していくことにした。自分で視点を選択し、グループ内で重ならないように調査テーマを決めた。教師側から「テーマについて現状・原因・要因・これからの影響・予想される社会について」「根拠となる資料を必ずつける」ことを条件として提示し、まとめの様式は自由、グループ内発表を行うことも確認して調査に入った。

現代社会の重点解決課題を考える (第5時)

調査してきたことをグループ内で発表していった。瑞希は「自立していそうで自立できていない日本」

というテーマで「海外に頼る食料・工業原料」について資料をもとに2枚にまとめて自説を構築していた。



「現在の自給率のままでは、国民に対する安定した食料供給に支障が出る可能性が高い。(中略)政府や行政、企業ばかりではなく国民を含めた日本全体が一丸となって取り組むべき課題である。消費と生産の両面から食料を見直していくことが必要である」

そして、班ごとに調査内容をもとに日本が抱える最重要課題を3つ選び、重要度順に黒板に貼っていった。

10班は「①政治問題、②環境問題、③人間」として、

人間にこだわっているようである。瑞希の6班は「①資源問題、②政治問題、③食糧問題」としていた。全体で見ると政治問題が圧倒的に多く、環境問題と続いていた。少子高齢問題を挙げたのは1つの班のみであった。

この時間の最後に「日本は重要解決課題があるけど、中学生が問題って思っていることは、当然大人は考えているし、国も当然考えているはずだよ。きっと何か解決するための方策を計画または実行しているはず。何か知っているかな？」と問いかけてみた。子どもたちからは「子ども手当」「TPP」などいくつか声が上がったが多くは知らなかった。次時は、重要解決課題について解決策がないか考えて行くことを伝えた。

重要解決問題の解決策を探る (第6時)

「現代社会の問題点を解決するための政策や取り組みはないのだろうか？」と資料をもとに調査していった。

資料は「民主党マニフェスト(2010版)」,「12年度政府予算案概要(新聞記事2011.12.25)」,「消費増税と社会保障の一体化(新聞記事2011.12.31)」を使用し、子どもたちから課題としてあがっていたものを5つのカテゴリーに分けて政策を調査していった。

細かい資料をじっくりと読んで、それぞれの分野で数多くの政策が計画、実行されていることを新しく発見していった。特に「少子高齢・子育て・福祉・

就職関連」にたくさんの予算が配分され、数多くの政策が行われていることをつかんでいった。

教師：これだけたくさんの政策が行われているなら、重要課題もなくなってくるはずだね。

良太：たくさんしていても効果がないんじゃないかな。

朝日：無駄にしていることもあるかもしれないし。

良太：国会も混乱していて、きつとうまく動いてないと思いますよ。

たくさん政策が行われているが、効果については疑問視している声も出ていたので、教師から「それでは、今後の日本に大きく関わる政策を1つ選んで効果があるのかどうか検討していこう」と提案した。

子どもたちから出てきた検討していきたい政策は、「消費税増税」「TPP」「原発再稼働」「高額医療費」「社会保障と税の一体化」「子ども手当」であった。希望は「原発再稼働」が多かったが、ここは検討の内容、方法等を考え、教師側から「TPP」について検討していくことを伝え、子どもたちの了承をとった。

政策を検討して有効性を探る (第7・8時)

最初に政策とは「国民のため、よりよい国をつくるために考え、行われている」ということを前提にすることを伝えた。まず、TPPの検討をするために、資料をもとにTPPについて基本的な内容を調べることにした。4種類(瑞希のレポート、TPP基本資料、TPP新聞記事、教師作成日本の現状)を配布し、重要なところに線を入れながらTPPについて調べていった。その後、TPPが導入されたらどうなるかという新聞記事資料を2種類配布し、導入された後に影響を受ける立場の人たちを確認していった。新聞記事資料はじっくりと読む時間を確保し、各自TPPに対する自説を構築していった。

影響を受ける立場の人を分類して、班ごとに調査する立場を選択した。

「農業(米、小麦、酪農、畜産)」「企業(自動車、家電、薬品、投資家)」「貿易、関税、労働者、資格、保険」「国民、消費者、失業者、外国の人」

この立場の分類が難しく、上記のような分類でよかったかどうかは疑問が残るが、資料の量などと子どもたちと意見交換しながら分類していった。担当のグループに関連の新聞記事資料(2～3種類)を配布し、家庭で調査してくるようにした。

そして、第1回目の賛否の意思表示をしてみたところ、賛成は数名で、ほとんどは反対であった。どちらともいえないも数名いた。それぞれの立場で調べてきたことを班の中で発表していった。配布資料

以外でも自宅で調べてくる子もあり、それぞれの立場での話し合いが展開していった。

しっかり調べてきたため、一人一人の時間がかかる様子であったが、予定の時間でグループの意見として賛成か反対かを意思表示してみた。「農業関係」は全て反対、「企業関係」は賛成、「関税・貿易・保険」は反対、「国民・消費者」はやや反対という結果であった。10班は企業の立場としてやや反対の意思表示であった。

次に、短い時間ではあったが、班の中で共有したことを違う立場の班と交流し考えを深めるために、クロスセッションを行った。ジグソー班を教師が組み、自分の班の立場の主張をし、違う立場の考えを聞いて、TPP参加の是非を考えていった。

ここでもじっくりとした話し合いの時間をとれなかったため、十分な合意形成はできていなかったが、ひとまず参加の是非を聞いてみた。すると全班反対かやや反対という結果になった。それぞれの立場での主張を全体に共有するために、4つの立場から意見を発表し、教師が板書をしながら、立場による意見の違いを可視化していった。

ここで教師は、ほとんど反対になってしまうことを予想していたので、もう少し視点を広げるために、子どもたちに揺さぶりをかけようと予定の授業プランを変更することにした。

2年生の6月に「アジアのリーダーはどこだ？」(地理アジア州)の学習したときの啓の最終レポートを再読することにした。このレポートは、アジアの中でリーダー的な存在になっていくために、他の国と連携していく必要があるという内容のものである。昨年度アジアを学習していたときは、日本はもっとアジアと連携していかないと日本の将来はない。もっともっと国際化、国際交流の必要性を訴えるレポートであった。しかし、今回TPPの問題になると視座が日本になってしまうためか、デメリットを強調した反対になってしまう。このレポートを提示することで、もう一度考える時間をとることにしてこの時間を終えた。

合意形成の視点をもって考える (第9・10時)

ジグソー班からスタート。前時にデザインを変更した部分を進めていった。

教師：いろいろな立場の人の意見をもとに話し合って賛成か反対の意思表示をするのは難しかったよね。意見が合わなかったら最終的にはどうすればいいのかな？

良太：多数決だね。

教師：そうだね。最終的には多数決だけど、昨日の話し合いなら、多数決で反対決まっちゃってるね。政策を比較

検討するための視点を考えてみよう。

各班で政策を検討するための視点を考え、全体で発表した。

「持続可能か」「その場しのぎではないか」「利益が偏らないか」「みんなが理解しているか」「不利益がないか」「弱者は困らないか」などの視点が出てきた。

これらの中から、政策の是非を検討する視点を選択し、2軸座標でそれぞれの立場を検討していった。2つの班の考えを全体で発表していった。

やはり農業分野での不利益に対することが反対の大きな要因になっているので、農業も様々な工夫をしている事例として、「J A越前の米輸出開始」の新聞記事を配布し、TPPに向けた新たな取り組みがあることを紹介した。

ここで物事を考える基準として「効率」と「公正」について、各班から出てきている視点をもとに教師から説明をした。この視点をもとに2軸での比較をもう一度見直し、グループで最終討議をした。そして、TPPの参加の是非について自説を構築していった。それぞれの考えを班の中で交流し、全体での最終採決を行った。結果は賛成が多くなり、反対は激減した。賛成の中でも条件付き賛成も多くでた。

敦也は最終意見として

「TPPに反対です。まず効率の観点から見て、より多くの人のためになっていない。なぜなら農業でみるとやはり外国の安い物ばかり入ってきてくるので日本での農産物はほとんど外国のものになる・・・(略)」

敦也は全班の特徴を捉えるところでは人が変わらないという根本的なところにこだわっていたが、TPPの検証に入ると視点をしっかり持って自説を構築してきた。「効率と公正」の視点を使ってTPPの最終意見をまとめることもできていた。

最後に改めて現在、これからの日本のネーミングをつけたレポートを書いて、班で意見交換し単元を終わった。

3 省察

ネーミングをもとに現代社会の特徴をつかむ

現代社会の特徴をつかむために「現代社会は〇〇

だから□□な社会である」というネーミングをもとに学習を進めていった。単元を通して自分の考えたネーミングを捉え直しながら、これからよりよい社会を創るための提案につなげていくことにした。自分たちも社会の一員であり、現在、そしてこれからの社会において、社会的事象に対して多様な視点で検証し、自分の考えを持って他者と協議し、それを表明することが社会参画へ向けての大事な要素と考えている。そのため、最初に今までの学びをつなげるために、ウェビングマップを使いイメージを膨らませていった。このマップから自分たちの生活する社会は、様々な面があることを実感し、ネーミングをつけた。それをもとに、その社会の利点と問題点を考え、将来どのような社会になっていくかを予想したことは、社会の一員であるという意識を持たせ、自分たちの問題として主題を解決していくことにつながっていった。このネーミングは、単元を通して3度修正や見直しをかけたり、新たなネーミングを考えたりした。単元の最終過程ではネーミングをもとに振り返り、学びの変容を子どもたち自身で省察していけるようにしていった。

本校の学びのサイクルの「省察」の過程では、単元の最初から作成してきた自分やグループネーミングを見比べ、最終レポートを書いていった。社会科ではワークシートや資料をポートフォリオするためファイリングを行っている。自分の学習物だけでなく、配布資料、クラス全体の課題や全班のネーミングなどのモニタリングなど、探究の過程や、自分の学びの変化を子ども自身が実感できるようにしている。本単元では、ネーミングを単元を通して何度も作成していくことで、学びの変容をつかむことができたと考えている。

多様な視点で社会的事象を捉える視点をつかむ

子どもたちから表出された現代社会の問題について、現実の取り組みがどうなっているかに課題を移していった。単元の中では2つ目のスパイラルに入る段階である。今回は政府が問題という意見が各班から出され、政府がよくない＝問題点が多いという短絡的な思考も見られた。

そこで、政府政策や与党マニフェストなどを調べ、問題を解決する政策や取り組みが数多く実施されていることをつかむことが有効であったと思う。さらにそれらは、有効な政策、そうでない政策と様々であるが、その中から、将来の日本、すなわち自分たちに大きく関わってくる問題を1つ取り上げ、その政策の是非について考えていった。様々な立場の人の視点からその政策を見つめ、利害関係を調査し

ていく。それぞれの立場の主張を通して、より多くの人の利益になっているか、その利益は偏っていないかを2軸座標を使って検証していった。今まで何度この手法で検証を行ってきたが、ここから見えてきた問題点を修正し提案していくことで、事象を検証するときの視点や尺度を獲得していく。この獲得により、より社会的事象を見つめる視点が鋭くなり、効率的に考え、合意形成することができるようになると考えている。この單元だけでなく、年間を通して繰り返し行っていくことで培っていく予定である。

社会科の核となる学びについて

多様な視点で社会的事象を見つめる力はこれまでの学習においても十分に培われていると感じている。3年生の社会科学習では、社会的事象をより自分のこととして捉え、仲間と協働して考えを深め、新たな視点を獲得したり、考えが変容したりしていくような社会認識の深まりを目指している。現在そして将来の自分に生きて働く力となることを求めているのだ。公民学習の導入単元で、より大きなテーマであるTPPを取り上げ、政治、経済、そして自分たちの生活も関わっている問題に対しても、自分たちで考えることができることを体感することは大切なことだと考える。

10班の敦也は単元の最初はなかなか意欲が高まらなかった。自分のネーミングはしっかりつけていたが、グループのネーミングになると積極性が小さくなっていた。敦也は最終レポートで以下のように述べている。

ネーミング「現代社会は人々が国家全体の問題に興味を持ち、国全体で解決していかなければいけない社会」
僕たちの回りではテレビや新聞などのメディアがあり、それによって、様々な情報を得ることができます。しかし、それに対して僕たちが興味や関心を持たなければ何の意味もあり

ません。実際、先生が『このカテゴリーに入る政策を何か知っていますか』というのに対し、僕は全く答えることができませんでした。TPPについては最初ほとんどの人が反対に挙げていたのに、授業最後には半数以上の人が賛成に手を挙げたところから、僕たちは国が大きな決断をしようとしていたことを全く知りませんでした。(後略)」

敦也にとって単元を通して今までの自分の国や国民に対する考え方が変容したことがわかる。自分も1人の国民としての自覚が芽生えていることもわかる。このような思いを今後の学習につないでいくことで、社会科のめざす力を培っていけると考えている。

探究するコミュニティでの学び

本単元の主題の答えは1つではない。多様な考えが出てくる中から、合意形成をしていくというまさに本校が求めていることが題材であった。しかし、自分の立場だけでなく、違う立場の視点に立って考えることは非常に難しいと感じた。自分の意見とグループの他の人との意見の違いが生じているときはコミュニティでのコミュニケーションを通して、よりよい考えはどうすれば構築できるかを考えながら進めていくことができる。だが、自分でない違う人の立場に立って考えているときの意見のズレを合意形成に導くのはかなり難しいと感じた。社会科では根拠となる資料をもとに、それらをつなげていくことが大切だと感じた。今回「効率と公正」の視点を学んだことを、今後のコミュニティの学びでも活かしていけるものと考えている。

さらに、単元のデザインについては、柔軟に変更できるものでないといけないが、教師の思いと子どもの学びをすりあわせ、子どもの学びを見取りながら展開していく重要性を再認識することとなった。

(森田 史生)

参 考 文 献

福井大学教育地域科学部附属中学校『研究紀要』第36号,2008.

福井大学教育地域科学部附属中学校『研究紀要』第40号,2012.

福井大学教育地域科学部附属中学校『研究紀要』第40号別冊 社会科編,2012.

塚田勝利『福井大学教育実践研究第36号「安心な未来社会をつくりあげるための政策を協働で考察することにより現代社会を見つめ直す社会科授業の実践」』福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター,2011.

北俊夫『社会科の学力をつくる“知識の構造図”』 明治図書出版 2011.